

# 成人日本語学習者における人称代名詞の使用

## —僕と俺を中心に—

### The Usage of Japanese Personal Pronouns on Adult Learners:

### An Analysis of *Boku* and *Ore* in Use

小玉 博昭

香港大学博士課程

#### 要旨

人称代名詞「私」は男女を問わず使用でき、書き言葉、話し言葉の双方でも使うことのできる汎用性の高い単語である。この汎用性の高さから成人の男性学習者は「私」を多用し、男性の日本語母語話者が「僕」もしくは「俺」を使うと考えられる場面でも「私」を使っているのではないかという仮説を検証するため、日本語の代表的なテキストにおける「私」「僕」「俺」の出現頻度や扱われ方を概観し、記述式のタスクシートを使って、男性の学習者および母語話者の一人称の使用について調査した。その結果、テキストにおける「僕」「俺」の登場回数は「私」に比べ圧倒的に少ないことが明らかとなった。また、一人称の使用状況も母語話者では「僕」「俺」がよく使われているのに対し、学習者は「私」を多くの場面で使っているのが確認された。これまであまり注目されてこなかった日本語学習者の「僕」「俺」の使用、また香港で日本語学習形態の大部分を占める生涯学習という文脈から、これらの調査結果を考察した。

#### キーワード：

人称代名詞、成人日本語学習者、生涯学習、男性語、僕と俺

# 成人日本語学習者における人称代名詞の使用 —僕と俺を中心に—

小玉 博昭  
香港大学博士課程

## 1. はじめに

国際交流基金の2012年の調査によれば、香港における日本語学習者の70%以上が学校教育外の教育機関で日本語の学習をしており、残りの30%をそれぞれ初等、中等、高等教育機関で学ぶ学習者が占めていると報告されている。民間日本語学校や大学附属の日本語コースなどでも青少年のためのプログラムが用意されているが、基本的には成人学習者を対象にしており、授業も仕事などの後に出席できるよう夕方以降に開講されるのが一般的である。また、学習目的も学位や資格の取得、ビジネスで必要などというより、日本の文化への関心や旅行に関連したものが多い。このような背景を持つ成人の学習者が多いことから、香港では生涯学習としての日本語教育の在り方が注視されるべきであろう。

そのような学校教育外で日本語を学ぶ成人学習者にとっても「私」はかなり初期の段階で紹介され、初級文型の一つ「～は～です」という名詞文の導入がされる時に目立って導入文や例文にみられるようになる。代表的な日本語テキストの一つ『みんなの日本語』でも、初級Ⅰの第1課、最初の文型「わたしはマイク・ミラーです」で登場している。この後、「私」は各課に必ず登場し、多くの会話練習および作文練習にも使われるようになる。「私」は男女共に使用ができる一人称の人称代名詞で、会話はもちろん作文でも使うことができるため、学習者にとっては大変便利なものであろう。

それに対し、話者が男性であることを表す一人称「僕」は第20課、「俺」については中級Ⅰ第7課で登場する。「私」と比べ、「僕」と「俺」の登場が遅いこと、また、性差やフォーマルさの度合いなどが関係してくることから、「僕」と「俺」の使用は学習者にとって「私」より敷居の高いものとなる。

テキストでの登場頻度に比例するように学習者の発話でも「私」はよく見られ、学習者が男性であってもその汎用性の高さから「私」が選択され、そのほかの一人称の使用が限定されているのではないだろうか。この仮説を検証する形で論を展開する。

## 2. 先行研究

### 2.1 「私」について

庵他(2001)によると「私」は待遇的に中立で、特に使用際して「僕」のように性差が問われないとしている。また、「(日本語の一人称が)常に使われなければならないものではないことに注意が必要です。一人称代名詞は省略されるというよりも、必要な場合に顕現すると考えたほうが実態に即しています。」(庵他, 2001)とあることから、日本語母語話者においては「私」や「僕」「俺」といった一人称が発話中に出てこないことがあることを留意しておきたい。また、熊抱(2006)によれば、日本語の一人称は性差が表れ、話し手と聞き手の関係や発話された時点でのフォーマルさの度合いによってその使われ方が変化するとしており、以下の図にまとめている。

図1：日本語の一人称単数

←Informal		Formal→	
(男性) 俺	僕/自分	わたし	わたくし
(女性) ← あたし	→自分	わたし	わたくし

(熊抱 2006) より抜粋

この図からわかるように、「私」はその使用に男女を問わず、また、どちらかといえばフォーマルな表現に含まれることから「私」は聞き手を不快にせず、学習者が気兼ねなく使用できるという点がうかがえる。

### 2.2 「僕」と「俺」について

待遇的には中立の一人称だが、男性が主に使うものとして「僕」があり、ぞんざい、仲間語として「俺」があると庵他(2001)で説明されている。また「僕」の使用域については成人男性も使えるが、会議などの改まった場では避けられる傾向が強く、その場合は「私」や「わたくし」が使われるとしている。このようにフォーマルな場では「僕」は敬遠されるというのが一般的な向きだと思われるが、桜井(2001)では職種によっては「私」および「俺」が一切使用されず、すべて「僕」が使われていることが報告されている。一方で、デザイン事務所やミュージシャンについては「俺」があらゆる場面で使われていたという。これと対照的なのは大学や研究機関で、「俺」の使用例は全く確認されなかったことが報告されている。ほぼ固定観念的に改まった場面では「僕」「俺」は使われないと学習者は信じているかもしれないが、実際の母語話者による使用は個人差や自身の所属によって異なり、柔軟に使われているようである。

## 2.3 日本語教育における「僕」「俺」について

男性的発話 (Masculine Speech) についてインタビューおよび分析をした Itakura (2008) では一人称だけではなく、終助詞「ぞ」や腹部を意味する「はら」「おなか」などの単語の使い分けを含めた包括的な視座から、香港における男性日本語学習者による男性的発話の使用やそれについての印象がまとめられている。Itakura (2008) のインタビューからは男性的発話が粗雑で乱暴な印象を受けるため、使用を控えつつも男性の日本語母語話者との会話では友好関係や親しさを強調するものとして活用している学習者などが報告されている。また、必ずしも日本語における性差などの文化的要素を受け入れなければならないとは考えていない学習者がいたことも指摘している。

メイナード(1990)では、日本語教育における男性的発話について「私はすしを食べました」の女性的発話 (Feminine Speech) として「私、おすし食べた」と男性的発話の「おれ、すし食った」など、女性的発話と比較してその違いが紹介されている。このほか日本語教育と性差についての先行研究として浅田(1998)、遠藤(1990)、トムソン(2002)などもあるが日本語の男女差についての解説もしくは女性語および女性的発話にその焦点を合わせているものが多く、男性語や男性的発話を日本語教育の文脈で肯定的に捉えている研究は多くなさそうである。

成人男性の学習者ががくだけた状況であっても「僕」や「俺」を使わず、「私」を多用することが事実だとすると、学習者の実際の使用は桜井(2001)で報告されているような日本語母語話者の一人称の使用状況と乖離することになる。また、Itakura (2008) が報告しているような「僕」「俺」を含む男性語の使用が親しさを表すものであると理解していながらも、相手に否定的な印象を与える恐れがあるとしてその使用が消極的な学習者も、やはり「私」を使うことに落ち着いてしまうのではないかと予測できる。

## 3. 調査

### 3.1 調査の概要

本研究では以下の三つの調査を行った。

1. 日本語テキスト『みんなの日本語』初級・中級本冊における「僕」「俺」の扱われ方
2. 記述式タスクシートによる成人の男性日本語学習者における一人称の使用状況
3. 記述式タスクシートによる成人の男性日本語母語話者における一人称の使用状況

**成人日本語学習者における人称代名詞の使用**  
**—僕と俺を中心に—**

今回調査の対象としたテキストは代表的なテキストで香港でも使われているスリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』『みんなの日本語中級Ⅰ・Ⅱ』本冊で、それ以外の副教材等は調査の対象にしなかった。一人称使用調査には記述式のタスクシートを使用し、対象の学習者は香港で生涯学習の一環として日本語を学ぶ成人学習者25名で初級プログラム254時間をすでに修了した中級以上の日本語学習者である。年齢層は20代前半から60代までと幅広い。母語話者の構成は日本国内在住でかつ関東地方在住の20代後半から40代までの10名の協力を得ることができた。

### 3.2 テキストでの「僕」「俺」の扱われ方

#### 3.2.1 『みんなの日本語』における「僕」

具体的なインプットを探るため、香港でも広く知られている代表的なテキスト『みんなの日本語』初級および中級本冊での「僕」「俺」の扱われ方と登場頻度を調べた。以下は「僕」が登場する課とその扱われ方についてまとめたものである。表中の性別での(男性)は「僕」という記述以外の要素から性別の判断ができないものを表している。「僕」が男性の使う一人称であることを理解していない学習者は、その発話者が男性だと判別できない可能性が高いと考えられるものである。次の表1は『みんなの日本語』初級および中級本冊で扱われている「僕」についてまとめたものである。

**表1：『みんなの日本語』初級Ⅰ・Ⅱ、中級Ⅰ・Ⅱ本冊における「僕」の使用**

課	話者	性別	年齢 年代	場面・状況	相手
初級 第20課	僕	不明	不明	不明	なし
初級 第25課	10歳の 男の子	男性	10歳 子供	子供からの回答	インタビュアー
初級 第45課	小川 たけし	男性	大学生	相談員への相談	相談員
初級 第47課	高橋	男性	社会人	同僚との会話	同僚
中級 第5課	僕	(男性)	不明	モノローグ	なし
中級 第7課	僕	(男性)	不明	女性との会話	女性

課	話者	性別	年齢 年代	場面・状況	相手
中級 第10課	太郎・次郎	男性	子供	子供の発話	わたし
中級 第12課	僕	(男性)	学生	モノローグ	なし
中級 第13課	僕	(男性)	不明	モノローグ	なし
中級 第18課	僕	男性	不明	モノローグ	なし
中級 第18課	恋人	男性	若い カップル	恋人間のけんか	ガールフレンド
中級 第19課	吉田 (先輩)	(男性)	大学 7年生	部活動の歓迎会	部活動の後輩
中級 第20課	臥牙丸 (力士)	男性	不明	相撲部屋での インタビュー	機関紙の記者

「僕」が初めて登場するのは初級Ⅰ第20課、文型4の導入文「きょうは僕の誕生日だ」である。この課では普通形が初めて導入されるため、文体もカジュアルなものになっている。『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』では文型についての説明と導入例を中心に書かれており、語彙の一つとして「僕」が紹介されているのみにとどまっている。そのため、「僕」の使われ方や意味については教師の教え方やその教育機関のポリシーなどに大きく左右されることが予想される。また、第20課の会話練習でも「僕」を使う練習はなく、この課では「僕」を実際に学習者が使って練習する機会には設けられていない。ここでは場面設定や状況を説明する記述および挿絵も一切ないため、学習者は教師から「僕」について説明を加えられるか、自分で辞書等を調べていなければ「僕」が男性を表す一人称であることがわからず、また、その使い方も知ることができないと考えられる。第20課以降は、25課と45課で登場するが、いずれも読解文中での登場となっている。ここまでのところ、聞き手を連想させる場面設定はあるが、実際の聞き手からの返答ややりとりの記載はない。そのため、ここまでのところで学習者は「僕」がどのような相手に対して使えるのかについてテキスト本冊のみから推測することは難しいだろう。

第47課で初めて会話文中に「僕」が登場し、高橋の発話「あっ、渡辺さん、ちょっと待って。僕も帰りますから…。」で紹介される。ここは子供や学生だけでなく、ビジネスマンが「僕」を使っている初めての描写となっている。また、会話文の文体が基本的にはデス・マス体で進められているものの、「あ、ちょっと、待って」というようなカジュアルな文体も書かれている。さらに、挿絵には職場を連想させる場面が描かれており、学習者は職場でも相手次第では「僕」が使用可能だと理解する可能性がある。これ以降『みんなの日本語』の初級Ⅰ・Ⅱでは「僕」の登場は確認されず、第50課をもって初級の本冊は終了であるため、初級終了の段階で学習者が持ち合わせている「僕」についての情報は表1の通りで、限定的なものとなっている。

初級終了時の段階で学習者が持っている情報から構築できる「僕」の使用域は、年齢が比較的若い男性話者によるあまりフォーマルでない状況での使用ということになり、この段階では話し言葉なのか書き言葉なのかの判別が難しい。なぜなら、第25課の10歳の男の子による発話も第45課の小川たけしの発話も読解文中にあるため、文体が会話調であるにもかかわらず、これらが口頭でのやり取りなのか文章でのやり取りなのか明確に判別できないからである。

中級になると『みんなの日本語』中級Ⅰ本冊の第2課「読みましょう」の中に、マイク・ミラーのモノログとして登場する。ここでは書き言葉と話し言葉が混在しているため、やはりあまりフォーマルな状況ではないこと、挿絵にマイク・ミラーが描かれているので発話者が男性で、かつ年配ではないことが学習者に伝わると予想される。さらに同じ第2課の問題9に「彼女とけんかをしてしまった」というタイトルで話者が男性であることが仄めかされ、その発話者によるモノログ形式で続いていく文章がある。第2課以降、中級Ⅰ本冊では第7課の文型「～(さ)せる」練習1に変形練習として紹介される以外は読解文のモノログ形式で発話者の一人称として使われている。

中級Ⅱ本冊になると第13課と第18課の「読もう」の読解文中で中級Ⅰ本冊と同じようにモノログ形式で登場するが、第18課「練習しよう」では恋人同士という設定の会話練習中に使われていることに注目したい。実際に学習者が「僕」を使ってやり取りをする練習はここで初めて与えられることになる。その後、第19課および第20課の「もう一度聞こう」の中の男性の発話内で「僕」が使われている。第19課では大学生が演劇部の入部歓迎会で自己紹介をする場面、第20課では力士が機関紙のインタビューを受けている場面となっている。

中級では初級とは異なり、明らかにインフォーマルな状況も多くみられるようになるため「僕」の登場が増えている。さらに、初級では見られなかった恋人同士のやり取りのような男女差のある会話文中での使用も見られるため、学習者が持つ初級までの知識で構築された「僕」の使用域はこの中級のテキストの使用によって修正されることになる。初級が終了した時点では若い男性が使う一人称で、フォーマルな状況では使われにくい、ということが推測できる程度のもものだったが、中級での「僕」の使われ方を見ると、雑誌のインタビューといったフォーマルな状況とも捉えられそうな場合でも使われることがあるなどと学習者が考えることもあろう。しかしながら、『みんなの日本語』において「僕」の登場は「私」に比べて圧倒的に少数で、「私」の使用例があまりにも多いため「僕」の存在が埋もれてしまい、その意味合いや使い方が目立たなくなっていることは否めない。

### 3.2.2 『みんなの日本語』における「俺」

「僕」に比べてフォーマルさの度合いが低い「俺」(熊抱, 2006; メイナード, 1990)の使用は初級 I・II 本冊では見られず、中級 I・II 本冊の第 7 課と 16 課での 2 例のみとなっている。

表 2: 『みんなの日本語』初級 I・II、中級 I・II 本冊における「俺」の使用

課	話者	性別	年齢 年代	場面・状況	相手
中級 第 7 課	男	男性	不明	落語の人物の発話 仲間への語りかけ	男たち
中級 第 16 課	同僚	(男性)	不明	職場でのやりとり	ほかの同僚

中級 I 本冊第 7 課の「読みましょう」で「おれには怖い物なんか一つもないよ」という読解文中の登場人物の発話で初登場となるが、「俺」には特に触れられずに文型や語彙を中心に確認問題や練習が続いていく。一方、第 16 課「練習しよう」の会話練習で「俺ってほんとにバカ」という同僚の発話が出てくる。ここでは既習の表現を使って、落ち込んでいる相手を励ますというタスクがあり、相手が同僚で少なくとも目上の者ではないという前提が与えられている。

『みんなの日本語』において「俺」の登場はこの 2 例のほかにはないため、上級にステップアップする前の段階で「俺」について学習者がテキストから得られる情報は



成人日本語学習者における人称代名詞の使用  
—僕と俺を中心に—






これ以外には確認できない。また、『みんなの日本語』での一人称の使用は、ほぼすべて「私」によって占められているため、「僕」以上に「俺」の存在感が学習者の中にどの程度あるのかあまり期待はできそうにない。

### 3.3 タスクシートによる調査

#### 3.3.1 成人の男性日本語学習者における一人称の使用状況

性差や使う場面の制約が少ない一人称「私」はその汎用性の高さから、男性の学習者はくだけた状況であっても「僕」「俺」ではなく、「私」を多用するのではないかと筆者は仮説を立てた。この仮説を検証するために香港で生涯学習の一環として日本語を学ぶ男性の成人学習者を対象に記述式のタスクシート（資料 1）を配布し、学習者の一人称の使い方を可視化することにした。タスクシート中のイラストはアルク『できる日本語 教え方ガイド&イラストデータ CD-ROM』を使った。

資料 1：タスクシート

	Your boss Mr. Tanaka	① (Please write how you invite him in JP.)
	Your colleague Mr. Suzuki	②
	Your secretary Mr. Ito	③
	Your JP teacher Mr. Hayashi	④
	Your friend Ken	⑤

タスクシートには5名の男性が並べられ、それぞれ学習者との関係が書かれている。①上司の田中、②同僚の鈴木、③秘書の伊藤、④学習者の日本語教師の林、⑤友人のケンと並んでおり、学習者にはそれぞれの人物を新居への引っ越し祝いのパーティに招待するというタスクを課した。一人称使用状況の確認をするため、三か月前から料理教室へ通い、パーティ当日は自分が料理を振る舞うということを伝えるよう実施前に説明した。

①④は目上の者として学習してきているはずなので、「私」を使うと予測される。このタスクシートで最も注目したい部分が②③⑤である。②⑤は同格以下の関係であるので、「僕」「俺」の使用が期待されるが、ここでも「私」が使われるのではないだろうか。③は秘書ということで目上の存在ではないと考えられるが、仕事関連の人間ということで改まった発話をしなければならないと思われる可能性も十分にありそう。

**表 3: 学習者の一人称の使用**

	①上司	②同僚	③秘書	④先生	⑤友人
私	23 (92%)	17 (68%)	19 (76%)	22 (88%)	10 (40%)
僕	1 (4%)	6 (24%)	3 (12%)	2 (8%)	6 (24%)
俺	0	1 (4%)	1 (4%)	0	6 (24%)
一人称なし	1 (4%)	1 (4%)	2 (8%)	1 (4%)	3 (12%)

表3は成人で男性の日本語学習者(中級以上)25名に対して行ったタスク活動の結果である。①上司と④先生は調査前の予測通り、「私」の使用率が九割前後に達している。⑤では四割が「私」を使っているものの、「僕」と「俺」を合わせ約半数の学習者がこれらの男性を表す一人称を使っていた。また、ここでは若干の一人称省略もみられた。テキストの調査では「僕」「俺」の登場頻度は「私」と比べてかなり少なかったのにもかかわらず、実際に「私」以外の一人称を使っていた学習者がいたことは非常に興味深い。

その他に本調査で注目すべき結果は②同僚と③秘書に対しての使用ではないだろうか。本調査における学習者にとって、同僚と秘書が「僕」「俺」ではなく「私」を選ぶべき人物だと判断していることがこの結果から垣間見える。②③はともに仕事関連の者であることから、学習者は一人称選択の際には相手の属性や所属を重視していることが疑われる。

学習者の一人称で最も使われた頻度の高いものは「私」で、①から⑤まで全ての対象によく使われている。これはテキストでの登場回数およびその使用における制限の

少なさから選択されたと考えられる。続いて「私」の使用頻度に大きく離されて、「僕」が二番目に選ばれているという結果になった。男性の成人日本語学習者は「僕」の存在が意識の片隅にありつつも、実際には「私」をよく使っていると言えるのではないだろうか。

### 3.3.2 成人の男性日本語母語話者における一人称の使用状況

3.2.1で行ったタスクシート(資料1)の日本語版を日本語母語話者の成人男性にも実施した。表4はその結果である。

表4: 母語話者の一人称の使用

	①上司	②同僚	③秘書	④先生	⑤友人
私	5 (50%)	1 (10%)	1 (10%)	4 (40%)	0
僕	3 (30%)	2 (20%)	4 (40%)	3 (30%)	2 (20%)
俺	0	4 (40%)	1 (10%)	0	5 (50%)
一人称なし	2 (20%)	3 (30%)	4 (40%)	3 (30%)	3 (30%)

母語話者によるタスクシートの回答で①④はやはり目上の者との認識からか、「私」を選択する者が多かった。それに対し⑤は学習者ほど「僕」は多く使われず、代わりに「俺」の選択が目立だった。他方「俺」は①④では全く確認されず、同格以下と考えられる相手を対象にするというような使用域がはっきりと表出している点も特徴的と認めざるを得ない。学習者の使用で②③は「僕」「俺」の使用が極端に少なかったが、母語話者は「僕」「俺」を合わせて五割以上が使用していることが確認された。やはり社会的な関係で同格の場合には「私」ではなく「僕」「俺」を使う傾向があるようだ。また、学習者の回答からはあまり一人称の省略はみられなかったが、母語話者は頻繁に一人称を使わないで発話をしていることがわかる。この点は庵他(2001)が言う、日本語の一人称は常に使われるというわけではないという指摘と一致する。さらに「僕」も一人称の不使用と同程度の頻度で①から⑤まで全体的に確認されることから、男性母語話者には汎用的で使い勝手のよい一人称だと言えそうである。

## 4. まとめと考察

成人男性の学習者と母語話者の発話における一人称の使用には違いがあり、学習者は「私」を多用する点が特徴的であるのに対し、母語話者の場合は「私」は目上の者以外にはほとんど使用されず、「僕」を広く使うか、一人称を使わずに発話をするこ

とが調査からわかった。「俺」について言えば、用いられることがほぼなかった学習者の発話に対して、発話者と同格以下の者に対してよく使われる母語話者の発話とでは大きく使用域が異なることが明らかとなった。このような違いを教育的な視点から考えると、テキストによる「僕」「俺」のインプットが少ないということも理由の一つと考えられるが、アウトプットの少なさも影響しているのではないかと思われる。通常、香港での生涯学習としての日本語の授業は、週に一度か二度で、仕事や家庭の事情で出席できないことも少なくない。教室外で日本語を使うチャンスは日本語母語話者の友人がいるか、日系企業で働いている等でなければなかなか確保できないのが実際である。

男性母語話者が広範囲の場面で使う「僕」、限定的な使用域ではあるが高い頻度で使われる「俺」は「私」に比べて圧倒的に『みんなの日本語』で取り扱われる機会が少ない。特に「俺」がわずかに二度の登場だったのにもかかわらず、実際の母語話者の発話でよく使われるということを教師はよく理解しておかなければならないだろう。なぜなら教科書の本冊がほとんど「俺」に触れていないため、副教材や活動などを通して「俺」と関わりを持たせなければ使用に結びつかないためである。また、「僕」「俺」の使用にまで辿りつけずとも、十分な理解があれば、日本の小説、ドラマ、歌、アニメ等々がより深く楽しめることは明らかであり、これは女性の学習者にとっても意味があることではないだろうか。

本研究の特徴は、男性のみを調査対象にしたことのほかに、成人でかつ、生涯学習の一環として日本語を学んでいる学習者に着目したということであろう。仮に通訳・翻訳などの専門的で高度な日本語能力の養成を目的としたプログラムであれば、プログラム修了時まで母語話者の使用に近い自然な日本語能力ないしは知識が求められて然りだが、教養や趣味としての日本語学習に従事する学習者に、果たしてどこまで教えるべきかという問題が浮上してくる。西岡(2000)や渡邊(2007)でも指摘されているように、成人の学習は学ぶ自由を保持しているのと同時に、学ばない自由がいつでも行使できる点が特徴的である。このことから考えられることは、成人学習者が生涯学習として日本語を学ぶ上で、教師が持つ「どこまで教えるか」という問題以上に、成人学習者の持つ「どこまで学ぶか」という問いが力を持つことになろう。この成人学習者における学習の選択性を「僕」「俺」の使用に照らし合わせると、知っているも使わない、もしくは知ることすら拒否できることになる。そのため、学習者が「私」の汎用性の高さから「私」の使用を選択した場合に、教師が母語話者がよく使うからという理由で「僕」「俺」の使用を強制することは学習の放棄を助長させてしまう恐れがあると考えられる。教える側は成人学習者の動機づけや特性などをよく理解しておく必要がある。

## 5. 今後の課題

本研究では発話行動を可視化させるためタスクシートへ記述をさせ、それを発話として分析対象とした。今回は仕事や家庭の事情で多忙な成人学習者へ授業後にインタビューや録音に協力してもらうことが難しかったため、一度に複数の学習者のデータを得られる記述という方法を選んだ。しかし「俺」「僕」は改まった場面ではあまり使われないので、記述という方法で発話データを集めることは、書き言葉であるため実際の会話や発言をデータとして分析するよりも制限がかかってしまう恐れがある。そのため、やはり会話や談話を録音して分析する手法も検討する余地が大いにある。また、タスクシート内の③秘書は特に母語話者からよく質問され、秘書と本人の関係性が上手く見極められなかったという声も聞かれた。さらに、教科書では「僕」「俺」はあまり取り上げられていなかったのにもかかわらず、実際に使用している学習者がいたことから、どのように「僕」「俺」を理解し使い分けているのかなどを探るためのフォローアップインタビューなどをして追跡調査をすることも必要であろう。また、調査するテキストも『みんなの日本語』だけでなく、様々なテキストでの「僕」「俺」の扱われ方を調べることも重要だと思われる。

本研究はあくまで日本語教育研究の一端という部分に主軸を置いたため、あまり母語話者の発話を深く掘り下げることはしなかったが、社会言語学や心理学からのアプローチを応用すればさらに広域で深みのある研究になるのではないかと思ひ、これらを今後の課題としたい。

## 参考文献

- 浅田浩文(1998)「第二言語としての日本語の男言葉、女言葉 —男女差を示す文末表現におけるの日本語学習者の産出、受容能力」『日本語教育』96
- 庵功雄, 高梨信乃, 中西久美子, 山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク, pp 514-515
- 遠藤織枝(1990)「男と女の話し言葉 —日本語教育と性差検証の視点から」『ことば』Vol.11
- 熊抱ゆかり(2006)「言語とジェンダー —日英語に表れる性差」『福岡大学人文論叢』38-1, pp 215-229
- 国際交流基金(2014)「2012年度日本語教育機関調査結果」  
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/hongkong.html>> (2016年1月29日)
- 桜井隆(2001)「『おれ』と『ぼく』」現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- トムソン木下千尋(2002)「日本語教育における性差の学習 —オーストラリアの学習者の意識調査より」『世界の日本語教育』12
- 西岡正子(2000)『生涯学習の創造 —アンドラゴジーの視点から』ナカニシヤ出版
- メイナード・K. 泉子(2009)『日本語の文法とコミュニケーション・ストラテジー (改訂版)』凡人社
- 渡邊洋子(2007)『生涯学習時代の成人教育学 —学習者支援へのアドヴォカシー』明石書店
- Itakura, H. (2008) Attitudes Towards Masculine Japanese Speech in Multilingual Professional Contexts of Hong Kong: Gender, Identity, and Native-speaker Status. *Journal of Multilingual & Multicultural Development Vol.29, No.6*

## 参考テキスト

- 嶋田和子(監修)(2011)『できる日本語 教え方ガイド&イラストデータ CD-ROM』アルク
- スリーエーネットワーク(2003)『みんなの日本語初級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク(2004)『みんなの日本語初級 II 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク(2009)『みんなの日本語中級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク(2012)『みんなの日本語中級 II 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク(2008)『みんなの日本語初級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク